012 マタイ 19 章 16～22

マラナサ・グレース・フェロシップ　菊地　一徳氏

マタイの福音書 19 章 16～22 節までをまず初めに通してお読みします。

『16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」（“永遠のいのち”とは言い換えれば“救い”ということです。死んでもなくならないいのち。天国に入れて頂けるということです。）17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」18 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。』

16 節のところに「ひとりの人」というふうに名前は出ていませんが紹介されています。この人は 20 節によれば青年であると言われています。まだ若いということです。ちなみに青年という日本語の言葉は、明治に入ってクリスチャンが「ヤング」”young”という言葉を翻訳した言葉で、YMCA の創立者の人が作りました。キリスト教青年です。YMCA の「ヤング」から来ております。もう一つ分かっていることは 22 節のところに『この人は多くの財産を持っていた』とあります。大富豪だったということです。この物語は興味深いことにマタイの福音書だけではなくて、他の福音書にも記録されています。所謂並行記事ということでマルコの福音書の方では 10 章のところに。そしてルカの福音書の方では 18 章のところにそれぞれ同じストーリーが記録されています。重複記事ということです。後で探してみて下さい。3 回も同じストーリーが記録されているということは、余程これは重要な物語であるということであります。若干それぞれの記事を読み比べると違いも少しあります。新しい情報を見出すことも出来ます。たとえばルカの福音書 18:18 のところには『ある役人』というふうにこの人のことが紹介されています。マタイの方では、この人は青年であって、多くの財産を持っていた。大金持ち、大富豪でありました。ルカの福音書 18 章の方では、この人は役人であったと。この人の職、地位といったものもそこで窺（うかが）い知れます。「役人」という言葉はギリシャ語では「アルコン」”archon”と言います。「アルコン」というのは直訳しますと「頭（かしら）、ディーラー、指導者」という意味です。「首長」というふうにも訳されますし、「支配者」というふうにも訳されます。ちなみにルカの福音書 14 章 1 節にもこの「アルコン」というギリシャ語が使われています。そちらではどのように訳されているかと言いますと『ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。』「指導者」というところにギリシャ語の「アルコン」が使われています。この「パリサイ派のある指導者」というのは、今から 2000 年前、日本でいう弥生時代の話ですけれども、その時にはこの指導者という「アルコン」と呼ばれる人たちがユダヤ社会の指導者・支配者でありました。この人たちは「サンヘドリンの議員」というふうにも呼ばれていまして、全部で 71 人から構成される最高議会のメンバーのことであります。大祭司と呼ばれる人が、宗教的・政治的な指導者のトップになるわけです。この人の下に 70 人の議員たちがいます。議員といっても私たちがイメージする政治家というだけではなくて、この人たちは聖書の専門家たち。今で言えば宗教学者とか、聖書学者とか、または法学者です。法律の専門家でもあります。ですからこの人たちは同時に検察官にもなり、また裁判官にもなる人たち。同時に大学教授のような人たち、そして政治家でもあります。今日このような役職を見出すことは難しく、実際に存在しないと思います。いずれにしましてもこの「役人」という存在は、ルカの福音書 18 章の方に使われているわけですが、ルカは 14 章でもう既に「パリサイ派の

ある指導者」のところに「**アルコン**」が使われていましたから、同じ福音書の中でこの後 **18 章**に来て「**役人**」という言葉が出ていますので、おそらくルカは同じ意味合いで「**アルコン**」を議員と、または指導者・支配者と、サンヘドリンの議員という意味合いで多分使っているかと思います。従ってこの**マタイの福音書 19 章 16 節**に出ている「**ひとりの人**」というのは、若手のエリート議員。今日のような政治家ではなくて、むしろすべての領域において秀でていて、エキスパートで、そしてトップに立った人たちの 1 人であったということです。そのことを今頭に置いておいて頂いて、この人は人がおよそ望むものすべてを既に若い時に手にしていた人だということです。

その人がイエスのもとに来てこう言いました。もう一度**マタイの福音書 19:16** のカギ括弧の中の質問に目を留めて下さい。「**先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。**」救いを獲得するためには何をしたらいいでしょうか。天国に行くためには何をしなければいけませんか、という質問でもあります。よく私たちもこの永遠のいのちについて、または救い、天国について、またイエス・キリストについて、福音について、多くの人に、1 人でも多くの人に知ってもらいたい。だから分かち合う、だから宣べ伝えようとします。でも、多くの場合は「そんな話は聞きたくありません。何の興味もありません。関心もありません。私は別に救われる必要なんかないんです。天国だとか、地獄だとか。行った事もないくせに、知らないことを言って。」とか、「聖書なんか人が書いたものでしょう。」いろいろと反対意見もあり、また無視されたり、鼻で笑われたり、また完全に拒否されてしまうこともあると思います。「自分の生活は何不自由なくて順調だし、何の問題もないので特別必要を感じません。私はもう十分満たされています。成功もしています。お金持ちです。社会的地位もあります。家族にも恵まれて。人生楽しいです。満喫しています。謳歌しているんです。特別に福音なんか必要ありません。イエス・キリストは私には必要ないお方です。救いは不要です。」と、そういうふうに応答されてしまうこともあると思います。ただ、皆さんはそれを聞いて尻込みしないで下さい。それを聞いて諦めないで下さい。それを聞いてちょっとショックを受けて、ブルーにならないで下さい。なぜなら誰でも今から私がこの物語から 6 つの点を皆さんにお分かちしますが、その 6 つの点は誰でもこの 6 つのポイントを持っているということ。それはすべての人が直面している現実というものです。 6 つあります。またすべての人が抱えている問題というものがあります。それが 6 つあります。これが今読んだ物語の中に見いだせます。 6 という数字はちなみに聖書では象徴的な数字として使われています。それは人間を表す数字であります。7 という数字は完全数ということで、 7 に 1 つ足りない数、要するに完全な数。これが 6 という数字で、これは人間に充てられている数字でもあります。ですから、是非人間について誰もが、すべての人が直面している現実というもの。口では何とでも言います。いくらでもカモフラージュ出来ます。いくらでも誤魔化せます。でも確実にその人たちは言い知れぬ悩み、どうにも出来ない問題というのを抱えています。これを 6 つ今から取りあげますので、できればメモをして頂いて、しっかりと押さえて頂きたいと思います。

まず第一番目に誰でもどんな人でも、これは日本人だろうと何人だろうと同じであります。地球上に暮らしている人ならば誰でも創造者の存在を知っています。創造者、クリエイターの存在を知っています。**16 節**のところをもう一度見て欲しいと思うのですが、このひとりの人は若さもありました。お金もありました。地位もあったんです。それでもこの人はイエスに足りていない何かを求めに、重大な質問を向けに行ったわけです。そして **17 節**でイエスの応答として「**なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。**」と。良いこととか、または良い方。これは創造者である神のことを言っています。「**もしあなたがわたしのことを良い者だと言うならば、良い方は神をおひとりなのであなたは私のことを神と呼ぶのか。**」ということをイエスは暗にこの若手の議員に語っているわけです。イエスは神なのか、それともただの人間なのか。ここで皆さんにもいくつかの聖書の箇所を開いて考えて頂きたいと思います。この箇所というのは皆さんの週報の方にもいくつかは記しておりますので、後で確認をしてみて下さい。まず**ローマ人への手紙 1 章**を開いてみて下さい。皆さんの週報では 1 番トップのところに引用しております。**ローマ 1:20～25** のところです。『[20] **神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ**（被造物というのは神によって造られたものです。）**、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。**[21] **というのは、彼**

らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。[22] **彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、**[23] **不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。**[24] **それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。**[25] **それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに**（創造者の代わりに）**造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。**』とあります。神様の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、すべて神の造られた被造物の中に見出すことが出来るとあります。**詩篇 19 篇**というところにも、神様の造られた被造物を見て、例えば空を見上げて満天の星空を見てみて下さい。そこにも私たちは偉大なクリエイターである神様のことを覚えます。天体の一つ一つが絶妙なバランスを持って、また素晴らしい秩序の中で、地球も勿論その惑星の 1 つとして回っており、そして輝いており、そしてそれぞれ営みを持っているわけですけれども、それらは偶然に生まれたものとはとても言い難いものであります。すべてが偶然ではない。これは何か非常に高い知性のあるものによってデザインされ、そしてそれが保持されている。そういったことも大きな天体を見ても、大宇宙を見ても感じることも出来ますし、本当に身近な足元にあるようなちょっとした被造物、小さな草花であったり、また昆虫であったり、そうしたものを見る時に本当にこれが偶然に生まれたとはとても思えない。素晴らしい美しさ、驚くべき機能を持っている。そういうことも私たちは見て、誰でも神秘性を覚えるわけです。何かそこに神様を感じて、きっと神様はいるんだと、突き詰めれば突き詰めるほど私たちはこの創造者の存在を無視出来なくなります。学問も極めれば極めるほど、やはり人間の知性で全て把握出来ないということ、特に科学の世界ではそうです。実際に科学者の多くは、聖書の神を信じないまでも、すべてが偶然に出来たとか、何もかもが進化論で説明出来るとは考えていません。何か知的な存在が背後にあって、これらが造られ輩出され、絶妙なバランスを持って、また驚くべき秩序を持って、それらが回っているのだということを認めざるを得ないわけです。そのようにして神の存在、または創造者の存在というものを誰もが認めざるを得ないというのが、聖書の主張でもあり、またこれはすべての人にも言えることかと思います。ただ、神を信じないと言う人は、それでもいます。その問題はどこなのか。単純に聖書が信じられないとか、神学的に理解出来ない、というよりも、むしろ今読んだ**ローマ人への手紙 1 章**にあるように、「**彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめない。感謝もしない。その無知な心は暗くなった。**」とあります。自分では知者であると言いながら、愚かな者となって、そして神を自分たちのイメージに仕立て上げて、所謂偶像というものを造り、自分の都合の良いようにそれらを礼拝して、利用します。その背後にあるのは、もし神様を認めてしまえば、この神様はすべてを造られた方だから、造られたものは造られた者に帰属しなければいけません。帰属するということは、この神を自分の基準として、絶対者としてこの方に従わなくてはならなくなるわけです。ですから神を信じない人たちは、むしろこの絶対者に従いたくない。絶対的基準なんか持ちたくない。自分の好きなようにわがまま放題、やりたい放題、肉欲の赴くままに自由に生きたいんだと。そういう人たちは神がいることは分かっていますけれども、でもそれを認めてしまうと自分の自由が奪われてしまう、束縛されてしまう、堅苦しい人生を強いられる。快楽も肉欲も何もかも否定しなければならなくなってしまう。そういうことからなかなか認めようとしません。ですから問題は神学的な問題と言うよりも、むしろ道徳的な問題です。自分のこれまでのライフスタイルを変えたくないから。やりたい放題の人生をやめたくないからであります。知的な問題でもありません。哲学的な問題でもありません。神学的な問題でもありません。単純にシンプルに道徳的な問題です。やりたい放題出来ない。自分が神であり続けたいのです。自分の人生は自分で支配したい、コントロールしたい、好き勝手にしたい。創造者など認めるわけにはいかない。これが本音であります。ですから、信じられないのではなくて、信じたくない。ただそれだけであります。

次に 2 番目のポイントとして、これはすべての人が直面している現実でもあり、すべての人が抱えている問題でもあります。最初は創造者の存在を誰もが知っているというポイントを挙げました。2 番目のポイントは、誰もが、世界中の誰もが、永遠への憧れを持っています。または天国への憧れなるものを持っています。死んだら終わりとは思えません。そう思いたくありません。それでは納得しません。それでは承服しません。諦めがつかないんです。何か死ん

でもその先にあるのではないか。死後の世界に人々は深い関心を持っています。まだ先があるに違いない。否、あって欲しいんだと。そういう憧れであります。今テキストの方で若手の裕福なリッチな議員が言った言葉をもう一度振り返りたいと思います。「**永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。**」永遠のいのち、まさに永遠への憧れです。死んでもなくならないいのち。天国。もう地震もない、津波もない、戦争もない、飢餓もない、弱肉強食もない、平和で繁栄の世界。人々は憧れています。このような憧れは実は神様がすべての人にインプットされたものです。人間ならば必ずこのような潜在意識を持たされています。これについて聖書こう言っています。**伝道者の書 3:11**。『**神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。**』人の心には永遠が与えられております。または永遠への思いというものが与えられております。これが永遠への憧れ、天国に対する憧れであります。参考までに天国という言葉も実はキリスト教用語です。聖書に使われている言葉で、「**天の御国**」という言葉が天国です。口語訳聖書では「**天国**」という言葉が勿論使われていて、新改訳聖書では「**天の御国**」というふうに訳されてますが、これが天国のことです。ですからクリスチャンでもない人が「**天国**」なんていうことを言ったら、全然分かっていないと思います。天国というのは、聖書に出てくる天国のことであります。ただいろいろ人々は永遠への憧れを持っていますから、天国をそれなりにイメージします。イマジンするわけです。この大震災でも世界中から支援が寄せられ、そして所謂セレブレティと呼ばれる人たち、セレブの人たち、芸能人、ハリウッドスター、そういった人たちもこの日本のために立ち上がろう、みんなで協力してひとつになって助け合いましょうということで、日本のために歌なんかも作っております。ジョン・レノンの『イマジン』という曲も今回日本のための歌ということで、また再度取り上げられましたけれども、皆さんも有名な歌ですから聞いたこともあると思います。歌詞も知っていると思います。これは昔から反戦の歌としてよく歌われたわけです。愛と平和の歌としても知られています。その歌い出しにこうあります。

Imagine there's no Heaven

“Imagine” というのは想像して御覧なさい。there's no Heaven ということは、「天国なんかないということを想像してごらんなさい。」

It's easy if you try これは「そんなに難しいことじゃないよ。」と。天国なんかないんだと想像してごらんなさいよと。このイマジンという曲はジョン・レノンによるものですが、神様がいないというゴスペルの歌であります。福音の歌であります。ジョン・レノンは自称「本能的社会主義者」というふうに自らを呼んでおります。このイマジンの中には彼の理想郷が歌われています。「国家がなければ戦争なんかない。宗教は戦争ばかり引き起こすから要らないんだ。個人財産なんて要らない。皆が平等に富を分かち合おうではないか。」神を知らない人にとっては全て耳障りの良い魅力的なメッセージが並べられています。ジョン・レノンはそのような神なき宗教の伝道者・宣教師でありました。その宗教のために彼は殉教までしました。暗殺されました。

でも、本当にここで皆さんに真面目に真剣に深く考えて、本当に天国なんかないんだということを実際に想像してみて下さい。天国なんかないんだと。皆さんも福音を宣べ伝えている時に「天国なんかないですよ。地獄なんか、そんなのは作り話です。勝手に人が想像しただけです。」と一蹴されてしまうこともあると思いますが、真剣にここで天国が本当にないんだということをイマジンして頂きたいと思います。4 つのポイントを挙げますので考えてみて下さい。

天国がないと本気で信じるならば、とにかく人は自分の若さや美貌を保つために何でもします。そのためにはお金も惜しみません。高い化粧品も、またエステやフィットネスクラブやダイエットや美容整形に多くのお金を費やすわけです。なぜならば、天国なんかないわけですから。地上の生活がすべてですから。

もし天国がないと信じるならば、長生きすること、健康を維持するそのためには何でもします。手段は選びません。健康補助食品もどんなに高いものでも買います。また保険や年金や、時には命をつなぐためには臓器の売買だって手を出そうとします。いつかもっと科学が進めば自分がこれで死んでも体を冷凍保存しておけばまたよみがえらせてもらえるかもしれない。手段は選びません。この地上がすべてですから。

3 番目に天国がないと本気で信じるならば、当然その人は地獄もないと信じます。ジョン・レノンのイマジンの歌の中にもそのようなフレーズがあります。No Hell below us 「僕らの下には地獄なんかないんだよと。あるのは空だけだ。」と。地獄というのは永遠の刑罰の場所であります。永遠の裁きの場所であります。つまり地獄がないということは、もう裁きがないわけですから、何をしたっていいわけです。やりたい放題です。犯罪も無政府状態で何をしても許されます。地獄なんかないわけですから。そうなれば当然倫理観が崩壊します。そうなれば当然退廃的な自堕落なライフスタイルがそこから生じます。絶対的な価値基準がないわけですので、人を殺したって構わないわけです。「何故人を殺してはいけないんですか。」進化論を本気で信じているならば、この問いには答えられません。なぜならば、すべては偶然に生まれたわけですから。偶然に生れたものに命の尊厳などないはずです。偶然に生まれたということは、偶然に死んでもいいわけです。生きている意味も価値もないわけです。ですから、殺そうと何をしようとレイプしようと全然咎められないわけです。それが進化論の考えであります。勿論進化論は科学ではありません。何にも科学的な根拠はありません。進化の過程を表すような中間種と呼ばれるようなもの、例えば猿から人間の間に移行するそのような化石は未だに発見されていません。仮説に過ぎないのに絶対的な真理であるかのように学校では教えられています。ですから、学校で子どもたちが全く規律も秩序もなくて動物のように振る舞っている。本能のままに小学校のホームルームがめちゃめちゃです。どうしたのでしょうか。理由は簡単です。進化論を教えているからです。進化論を教えているのに、どうして子どもたちはこんなふうになってしまったのか。当たり前です。命の尊厳なんかないわけです。意味なんかないわけです。「自分の体をお金で売ったって何が悪いんですか。減るもんじゃあるまいし。」小学生の時から援助交際など、罪悪感すら覚えることもありません。ですからここで絶対的な基準がなければ、もう世界は完全に崩壊してしまいます。

4 番目に天国がないと本気で信じるならば、これは重複する内容でもありますけれども、地上の生涯がすべてということになります。この世における成功がすべてということになります。この世の所有物がすべてということになります。すなわち物質的なものに縛られるようになると。物質主義または金銭主義に陥るようになります。物に執着するようになります。柵(しがらみ)だとか出てくるわけです。そして今さえ良ければそれで良いという刹那主義というものも生まれてきます。イマジンのジョン・レノンの歌の中にも Imagine all the people Living for today...今日を生きる、今日のためだけに生きる。聞こえはいいですけれども、それがジョン・レノンにとってのすべてであったわけです。だからやりたい放題です、後悔しないように。すべてのものは人類共有のもので何一つ占有しないんだという社会を夢見てきたジョン・レノンではありましたけれども、 40 歳でこの世を去りました。暗殺されました。その時に彼は 2 億 7,500 万ドルものお金を貯めこんでいました。全く矛盾しています。彼のイマジンという世界からはかけ離れた話であります。実際にイマジンの中では、お金は占有すべきではない。みんなで分かち合うべきだ。 1 人の金持ちが、特定の金持ちがお金を占有しようとするので、世界はおかしくなる。争いが生じるんだと言ってきたわけですけれども、実際にその彼は 2 億 7,500 万ドルという大富豪であったということです。

またこのジョン・レノンという人は、妻子を捨てて不倫の末、オノ・ヨーコという人と結婚しています。ジョン・レノンの親も離婚を繰り返したので深い傷を負っていたかもしれません。でも、その親と同じことをしています。このイマジンという曲は、そのオノ・ヨーコとの合作でもありますが、 2 人はフリーセックス、中絶、麻薬、離婚、家庭崩壊ということを繰り返してきた 2 人です。これらに全てドップリ浸かって溺れてきた 2 人のイマジネーションの世界はこの歌の歌詞であります。まさに文字通り幻覚の世界です。この世の天国、自分たちの理想郷をこの目に見える物質世界に実現しようとしたのが、彼らの思想でありました。所謂一言で言えば現世利益の世界です。

このようにしてジョン・レノンだけではありませんが、人はどこかで理想郷というものを求めています。これは古今東西昔から全世界に誰もが抱いてきた憧れです。いろいろな呼び名がありました。パラダイス、ユートピア、桃源郷、シャングリラ、または極楽浄土、アルカディアとか、いろいろな名前があります、呼び名があります。でもみんな共通していることは、それらは憧れの世界、理想郷、死んでもなくならない世界であります。今映画館でもナルニア国物語という映画が、まだ報じられていますが、あれは勿論皆さんもご存じのように、クリスチャンの C・S・ルイスという人の原

作で描かれている映画で、ストーリーはまさに神の福音であります。その C・S・ルイスという人がこういう言葉を残しています。考えさせられます。『**生きものに願望があるのは願望を満足させてくれるものが存在しているからだ。赤ん坊が空腹を感じる。それは食べ物という存在があるからだ。アヒルの雛は泳ごうとする。それは水というものが存在するからだ。人は肉欲を覚える。それはセックスというものが存在するからだ。もし私がこの世界で満たされない願望を抱いているとしたら、それは私が別の世界のために造られたという説明ぐらいしか成り立たないだろう。**』この世界でとにかく何もかも手に入れて極めようとしてもそれでも満たされない。この**マタイ19章**に登場するエリートの若い大富豪のこの議員も同じでありました。何もかも手に入れたのにまだ何かが足りていない。

これが 3 番目のポイントになります全部ですべての人が直面している現実、また抱えている問題を 6 つ挙げようとしているのですが、3 番目は心の空しさです。誰もが心の空しさを、心の中にぽっかり穴が開(あ)いているような空洞を持っています。テキストの**マタイ 19:21** のところで、イエスはこの人に言われました。**「もし、あなたが完全になりたいなら」**完全というのは完全無欠という意味だけではなくて、本当に満たされたいならばです。本当に満足したいならば。完全というのは満たされるという意味です。何でも揃っている、何不自由ない、満たされているようだ、幸せだと思える人の中にも、言い知れぬ空しさがあります。心の中にぽっかり空洞が出来てしまっているような。この人は若さもバイタリティーもありました。健康がありました。財産もありました。大金持ちでした。そして役人、サンヘドリンの議員、当時のトップです。大学教授でもあり、法律家でもあり、また宗教家でもあり、また検察官・弁護士、そしてありとあらゆる名誉・地位をこの人は手に入れていました。完全に成功街道まっしぐらというエリートだったわけです。それに加えてこの人は人格的にも素晴らしかったことが言われています。テキストの**18節**のところに、イエスは**「殺してはならない。姦淫してはならない。**（姦淫というのは最近使わなくなった言葉ですが、これは不倫してはならないということです。）**盗んではならない。**（税金もごまかさない。）**偽証をしてはならない。**[19] **父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」**これに対してこの人は**「そのようなことはみな、守っております。」**と。物凄い人格者ということです。宗教的にも、道徳的にも立派な人だということです。これだけ見れば「もうこの人はパーフェクトではないか。完全無欠ですよ。」と。「何もかも揃っているではないですか。それなのに何かまだ他にも欠けたところがあるというのでしょうか。」と。 **20 節**のところにこの青年がその言葉を使っています。**「何がまだ欠けているのでしょうか。」**これが現実です。何もかも人が羨むものすべてをこの人は手にしていました。それでもこの人は「自分が完全だ、満たされている。」とは自覚していなかったんです。「何かが欠けている、足りない。こんなものではないはずだ。」と。「すべてを手に入れてみたものの、これが私が求めていたものだったのか。空しい。」と。

聖書にはもう 1 人の若い大金持ちの支配者がいました。この青年よりもはるかに上に立つ者でした。その人の名はソロモンというイスラエルの王さまであります。このソロモン王については、特に先ほども**伝道者の書**というところを開きましたが、その**伝道者の書**の著者がこのソロモン王であります。是非興味のある方は読んでみて下さい。人生に空しさを感じている人は、是非読んでみて下さい。そこにソロモン王の言葉として、彼は自分のことを“**伝道者**”と呼んでいます。『**空の空。すべては空。**』何もかも空っぽだと。何もかも空しい。このソロモン王という人は、今日彼に並ぶような大富豪はいないと思います。ビル・ゲイツでも足元に及ばないと思います。ロックフェラーでも、ロスチャイルドでも、名だたる財閥でも、このソロモン王に並ぶような大富豪は歴史上いなかったと思います。あまりにも金(きん)が沢山有り過ぎて、もう銀が無価値。そういう世界であります。この人には世界中から集めた絶世の美女たち、今で言えばスーパーモデルから、ハリウッドスターから、誰もが羨む美女たちを 1,000 人もハーレムとして囲っていました。毎日がパーティー三昧です。世界中のエンターテイメント、世界中の美味しい食べ物が、いつも彼の宴会には集まってきました。ありとあらゆる快楽、そして勿論権威も欲しいままに。そして彼には教育もありました。驚くべき知識です。学者であります。いくつもの博士号を持つような人であります。その人が『**空の空。すべては空。**』と。**伝道者の書**で「何もかも手に入れたけれども、何もかも空しい。」と。そういう言葉を残しています。「これさえ手に入れば私は幸せになれる。大学に、自分の理想の職場に就職できれば。」とか、または「昇進できれば。この資格さえ手に入れば。」とか、「このブランド品が。マイホームが。彼氏やまた彼女をゲットすれば。結婚できれば、幸せになれる。これさえ手

に入れば、私は満足する。」多くの人はそのように思って躍起になって手に入れるためにそれらに奔走します。それらの地位に就くために、それらのお金を手にするために、必死になって頑張ります。ソロモンという人はそれらのすべてのトップに立った人です。にもかかわらず『**空の空。すべては空。**』と言ったわけです。

もう少し身近な例でお話ししたいと思いますが、ブラット・ピットという人は聞いたことがあると思います。日本のファンも多いです。この人はハリウッド俳優であります。この人の奥さんにあたる人も最近はいろいろなところで顔を出しています。アンジェリーナ・ジョリーという人です。国連の難民弁務官事務所の親善大使としても、ついこないだはハイチにも行きましたし、今回は日本の震災にも彼女は顔を出してくると思います。彼女もまた人も羨むような絶世の美女ということで、このカップルはもう理想であると。ハリウッドでそれぞれ成功した、地位も名誉もお金も手に入れた。でもローリングストーン誌のインタビューにブラット・ピットはこう答えました。「世の中は何もかも成功を求めている。でも成功したらその先にあるのは空しさだけだ。この世界が、この社会が空しさに向かっていくことを考えるだけで自分は恐ろしい。」と。「あなたには何かお考えがありますか。」というインタビューに対して「私には答えがありません。」とブラット・ピットは答えたそうです。何もかも手に入れたけれども、何もかもが空しい。手に入れていない私たちは、もしかしたらそれはウソだと思っているかもしれません。「手にさえ入れば絶対に私は満足する。幸せになれる。」と思っているかもしれませんが、試さない方がいいと思いますけれどもやってみて下さい。時間の無駄だと思いますけども。実際に手に入れてみたら分かると思います。こんなものかと。成功、サクセスを追い求めて、成功がすべてだと思って。でも成功を手に入れたとしても、空しい。空っぽである。答えがない。大金持ちでも、夜安心して眠れないのです。皆さんはどうでしょうか。「私は貧乏だけれども、夜眠れない。」そういう人もいるかもしれませんが、「もう心配で、心配で仕方がないんです。」と。いつ誰が自分の地位を陥(おとし)れて取って代わられるのかとか。いつこの財産が、いつこの生活が落ちてしまうのか、怖いのです。これでは足りないのです。上には上がいます。もっと、もっと。飽くなき欲望が人の心まで蝕(むしば)んでいきます。麻薬にも手を出します。信じられない話です。「あれだけのお金もあって、あれだけの地位も名誉もあって、あれだけ自由に何でも好きにできるのに、どうして麻薬なんて、あんなものに手を出すのか。結果は分かっているじゃないか。」それでも止まらないのです。やめられないのです。分かっていても、それが空しさであります。麻薬に手を出さなければもう耐えられないような空しさでする。考えるだけでおぞましく、恐ろしいものです。

4番目のポイントとして、３つ先に言いました。創造者の存在を誰もが知っている。そして2番目は永遠への憧れを誰もが持っている。そして心の空しさも誰もが持っている。４番目として誰もが死に対する恐れを持っている。死ぬのが怖いんですと。**ヘブル 2:14～15** にこう書いてあります。『[14]**そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。**（これは主なる神キリストが私たち人間と同じように血と肉を持った。人間となった。クリスマスのことを言っています。それは、なぜイエスは、キリストはこの地上に来て下さったのか。その理由として）**これは、その死によって**（十字架の死によって）**、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、**[15]**一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。**』誰もが一生涯死の恐怖につながれています。取り憑かれています。「神なんか信じない。」と言う無神論者でも、「死ぬのは怖くない。」などと豪語する者でも、実際に死ぬ時になったら身震いするのです。怖くて、怖くて仕方がないのです。死なんか考えたくないから虚勢を張って「私は、俺は死ぬことなんか恐れない。死ぬことなんか考えない。否、考えたくないのです。」と。でも現実は、全ての人は生まれた途端にもう死に向かっているのです。それが現実であります。人は全員死にます。死にたくなくても死にます。そんな死に方をしたくないと思っても、人は選べません。隠しているだけです。誤魔化しているだけです。カモフラージュしているだけです。本当は死ぬのが怖いのです。「死ぬ話なんかしないで下さい。縁起でもない。」それは誤魔化しです。この現実を見たくないのです。生きるために準備が必要であるように、死ぬためにも準備が必要であります。誰もが死ぬのです。でもその時、慌てふためいたりしないように。分かっているわけですから、死ぬことは。だったら私たちは動じることのないように、そのために備えていくことが必要でありますし、それが出来ます。勿論それがイエス・キリストを信じることであると、私は言いたいと思います。イエスはこの死の恐怖に

つながれている私たちを解放するために天からこの地に降りて来て下さいました。

後でその話も少し終わりにしたいと思いますが、もう一つ5番目として、誰もが抱えている問題、直面している現実として、罪悪感の重荷というものが挙げられます。罪悪感、若しくは罪責感の重荷です。または自責の念と言ってもいいかもしれません。良心の呵責、これも含まれると思います。すべての人が罪悪感を持っています。後ろめたさを持っています。自分が正しいとは思っていません。正しくないことをしているとどこかで思っています。裁かれるのではないか、呪われるのではないか、災いがあるのではないか、何か悪いことが起こるのではないか、自分の行いによって。恐怖におののいています。すべての人です。

有名な探偵物の作家のアーサー・コナンドイルという人がいます。その有名な探偵物では、シャーロックホームズは皆さん知っていると思います。そのシャーロックホームズの生みの親であるアーサー・コナンドイルがある時このような冗談をかましました。彼は結構いたずら好きで有名です。ある日彼は社会的に重要な地位に就いている 12 人の有名人にこのような電報を打ちました。(自分の友人たちにです。ですから冗談も通用すると思ったらしいのですが)『露見した。出発せよ。』それだけです。社会的に重要な地位に就いている超有名な友人 12 人に『露見した。出発せよ。』と、それだけの電報を送ったわけです。すると驚くことにその 12 人とも即刻その日に全員外国旅行に出てしまったという、これは冗談なんですけれども現実にあった話だそうです。つまり誰もがどんなに社会的に重要な地位に就いていても、著名人でも、どこかに後ろめたさ、罪悪感を抱えています。「自分はパーフェクトではないし、悪いこともしている。正しくないことをしてしまっている。良心が痛むようなこと、良心の呵責を覚えている。自責の念を持っている。罪悪感の重荷で押しつぶされそうだ。」人の最大の必要・ニーズというのは何でしょうか。それは『**赦し**』だと私は思います。赦されていること、これは私たちを罪悪感の重荷から解放するものです。「あなたは赦されています。」もしそのように宣言されるならば、私たちは本当に安堵します。ほっとします。「あぁ、良かった。赦された。」と。これが私たち人間にとっての最大の必要です。ですから、『**主の祈り**』の中でも「**日毎の糧を今日もお与えください。**」と。毎日の糧、これも私たちの肉体的な必要としては欠かせないものです。食べ物がなければ生きていけません。もう一つ「**私たちの罪をお赦しください。**」という祈りもその中には入っています。これは私たちの心にとって欠かせないニーズであります。赦されるということです。イエス・キリストはこの罪を赦すために、私たちが負うべきすべての罪の罰を十字架の上で負って下さいました。『**罪から来る報酬は死です。**』と聖書の**ローマ 6:23** に書いてありますが、その死の恐怖から私たちを救うために、解放するために、イエスはこの世に来て、そして十字架の死にまで従って下さいました。どんな罪でも「イエスキリストの十字架の贖(あがな)いが私のためであった。私の罪を赦してくださるためのものだった。私が負い切れないすべての罪の借金をイエス・キリストが自分の命の代価をもって代わりに払って下さった。借金を肩代わりして下さった。弁済して下さった。だから私はこの罪の借金からもう解放されたんです。」と、そのように信じることが出来れば、絶対にあなたは赦されます。どんな罪でもです。 一つだけ赦されない罪が聖書にあると言われています。これは「**とこしえに罪に定められるもの**」と言われています。それは**マタイの福音書 12:31** に書かれているもので、「**聖霊を汚す罪**」と呼ばれるものです。どんな罪でも赦される。でも「**聖霊を汚す罪**」だけは例外的にその一つだけは赦されない。それを端的に言うと、**イエス・キリストを信じない罪**だけが、赦されない罪です。何故かと言いますと、イエス・キリストだけが唯一の罪の赦しの手段であるからです。イエス・キリスト以外に救い主はいません。イエス・キリスト以外に私たちに与えられている罪の解毒剤は存在しないのです。私たちの罪はあまりにも重くて、膨大で、私たちの良い行いではとても相殺出来ない、とても賄(まかな)いきれない、とても返済しきれないものです。必要なのは、罪のないお方の命だけであります。イエス・キリストは罪を犯す事はありませんでした。ですから私たちにはこのイエスの命が必要なんです。命の代価が必要なんです。そしてイエスだけが死からよみがえりました。これはすなわち、イエスは罪がなかったということです。すべての偉人、聖人、歴史上の著名な英雄たちは、皆一様に死にました。でも、彼らはよみがえらなかったんです。イエスは違いました。復活されました。「そんな死人がよみがえるなんていう荒唐無稽な話、誰が信じるか。」とあなたは言うかもしれませんが、是非調べてみて下さい。疑うなら自分で調べてみて下さい。「鰯(いわし)の頭も信心から」というような信仰ではありません。是非自分で調べてみて下さい。二千

年間イエスの復活を否定しようとした人たちは五万といます 。世界中の人たちが、「イエスの復活さえ否定出来れば、イエスは神ではないということを証明出来る。」ところが未だかつて誰もイエスの復活を否定出来た人は１人もいません。だからこそまたキリスト教というのは、所謂世界宗教として最大のグループをなしているわけです。ヨーロッパの宗教ではありません。西洋の宗教ではありません。キリスト教は中東の宗教です。アジアの宗教です。なのに欧米社会を席巻(せっけん)しました。世界の隅々までイエス・キリストのことは宣べ伝えられて、すべての人に受け入れられています。何故でしょうか。本物だからです。

もう１カ所**第一ヨハネ 2:2**。イエス・キリストのことです。『**この方こそ、私たちの罪のための――私たちの罪だけでなく、世全体のための――なだめの供え物です。**』世全体、即ち全世界の罪のため、全人類の罪のためにイエスは十字架にかかって死んで下さいました。私たちを死の恐怖から解放するためです。私たちを罪悪感の重荷から解放するためです。私たちを心の空しさから解放するためです。何のために生きているのかも分からない。これから先どうなるのかも分からない。永遠に滅びることがないように、永遠の命を与えるためにイエス・キリストはこの世に来て、十字架にかかって死んで、よみがえって下さいました。自分の罪は一体何でしょうか。あなたの罪は一体何でしょうか。私の罪は一体何でしょうか。テキストの**マタイの 19 章**のこの“ある人”、裕福な若い役人、議員の罪は、一言で言いますと物質主義というものでありました。または貪(むさぼ)りと呼ばれるものであります。貪欲とも言います。**「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」**これらは皆守っていますとこの青年は言いましたが、でも１つ欠けているものがあったと言いました。それはこの人が持っていた持ち物であります。この持ち物が彼を完全に縛り付け、完全に支配していたわけです。物に取り憑かれているわけです。この人にとっての神は、物であったわけです。物質、またはお金だったわけです。持ち物がこの人の神でした。それはあなたも同じかもしれません。それぞれ神を私たちは持っています。「宗教なんかありません。無神論者です。」と言う人ですら、神を持っています。あなたが一番頼りにしているもの、それがあなたの神です。あなたが一番愛しているもの、それがあなたの神です。これがなければ生きていけないもの、それがあなたの神です。 一番熱情を傾けているもの、 一番時間をかけているもの、 一番お金を使っているもの、それがあなたの一番大事なもので、それこそあなたの神です。その神は全知全能でしょうか。その神はあなたを常に愛して守ってくれるでしょうか。この青年にとっては持ち物が神だったのです。それを手放すように、「持ち物を全部売り払って貧しい人に分け与えるように。」と言いました。それがこの人の神であったわけです。完全に物に縛られ、支配され、振り回され、コキ使われていたんです。欲しいものを手に入れてみると分かると思います。例えばマイホーム、夢のマイホームを手に入れました。しばらくは良いかもしれません。でも 10 年 20 年経っていくと段々古びて朽ちていきます。メンテナンスが必要です。あそこも傷んだ。これも傷んだ。その時買った、新調したいろいろな電化製品、家具なども傷んできます。気付いてみたら何もかも直さなければいけない。買い替えなければいけない。膨大なお金です。「こんなはずではなかった。マイホームさえ手に入れればもう一生何もしなくていいと思っていた。こんなにお金がかかるとは思っていなかった。こんなに工面して、こんなに大変な思いまでして、これを維持しなければいけないとはとても思っていなかった。」ショックを受けます。でも、そんなものなんです。物に縛られているならば、常にそれらにあなたは支配されます。ローンを払うことが、あなたの生きる目的になってしまいます。何のために頑張るのか。何のために仕事をするのか。何のために上司にガミガミ言われるのを耐えるのか。何のために家に帰ってきても奥さんに「これしか稼いでこなかったのか。」と。何のためにあなたはそれを耐え続けなければいけないのか。この青年は物に縛られて、所有物に所有されてしまっていたわけです。それはあなたにとっては違うものかもしれません。あなたにとっては物ではなくて、他のものかもしれません。青年はそれが分かっていたんです。だからイエスはそれを言われた時に彼は深く悲しんだのです。悲しんだということは、それが分かっていたんです。本当は分かっていたんです。でも、イエスにズバッと指摘されてしまったのです。

勿論ここで誤解しないで頂きたいことがあります。金持ちは皆だめなのか、悪いのか。金持ちは皆不道徳で肉的なのか。そうではありません。往々にしてそうかもしれませんが、ただ 聖書の中には大金持ちの人たちも、敬虔な信

仰者でありました。アブラハムだとか、またイサク、ヤコブといった族長たちは皆大金持ちです。財産家でした。ヨブもそうでした。ヨセフもそうでした。また新約聖書の時代でも、ニコデモという人やアリマタヤのヨセフという人、またはザアカイといった人も大金持ちでした。でも、彼らは皆それなりに敬虔な信者として描かれています。

もう一つ誤解してはいけないことは、貧乏人は皆霊的で敬虔なクリスチャンかと言ったらそうではありません。貧乏人でも卑しい根性の人たちは大勢います。むしろその方が多いかもしれません。ですから誤解しないで下さい。

ただお金というものは、不思議な魅力を持っています。神に仕えるのか、富に仕えるのか。原語では富というのは「**マモン**」です。お金の神。「**マモン**」というのは、英語の「マネー」"money"の語源となりました。神に匹敵するようなパワーを持っています。お金に頼ると私たちは神に頼らなくなります。お金に頼るようになると、神に相談しなくなります。銀行に相談に行きます。そうではないですね。私たちは神様に頼ることが出来ます。すべてのものを造られた神様に祈ることが出来ます。でも、お金を持ってお金に頼るようになると、神様を頼らずに祈ることもしなくなります。そして貧乏人を見ては見下げます。ホームレスを見ては見下げます。「仕事もしないで、ブラブラして、何しているんだ。」と。お金を頼りにするようになると、憐れみに欠ける人間になります。そういった弊害はお金を持つとありますので、気を付けたいと思います。

最後に 6 番目のすべての人が抱えている問題、直面している現実として最後のものです。それは**イエス・キリストによる罪の自覚**というものです。「永遠の命を得るためには、救いを得るためには、何をしたらいいのですか。何をしなければいけないのですか。」しなければならない、何をすべきか。そのような質問に対してイエスは「あなたには何も出来ない。」ということを最終的には結論として言います。自分では無理である。そこに私たちは皆気付かなくてはいけませんし、それを認めなくてはなりません。自分の罪を認めて「私には自分で自分を救う力はないんだ。」ということを認めなくてはいけません。それが、私が言っている"**イエス・キリストによる罪の自覚**"です。この自覚がなければ、あなたは罪の赦しを求めないわけです。この自覚がなければあなたは救い主を必要としません。「自分で何でも出来る。自分で頑張れば。自分で自分の尻拭いをします。罪の清算は自分で。自分で人生は切り開くんです。」罪の自覚がなければ、あなたは救い主の必要性を求めません、訴えません、感じません。「一生懸命頑張ってより良い人間になってみせるんだ。頑張るんだ。成功してみせるんだ。人から称賛を受けるんだ。」それでも間違いなくあなたの中には欠けが見出されます。欠けているもの。そしてあなたは行き詰まります。そしてあなたは縛られます。そんなあなたに、人となられた真の神、現実の神は、あなたの目を見てあなたの心にダイレクトに語ってくれます。「あなたは罪人である。あなたには私が必要だ。」と、これが罪の自覚であります。イエスに出会った者は全員この罪の自覚を絶対に持たされてしまいます。罪の自覚を持ちたくないから、多くの人は「イエスの話はやめて欲しい。」理由は簡単です。罪の自覚をしたくないからです。分かっているのです。このイエスに出会ってしまったら、自分の罪を認めざるを得ないということを、すべての人が知っているのです。だから聞きたくないのです。私もそうでした。イエスの話は勘弁してもらいたい。自分の汚いところ、恐ろしいところ、認めたくないところ、そのようなところが全て何もかもが見透かされているようで、何もかもが暴露されてしまうようなので、嫌だったのです。怖かったのです。だから「イエスの話なんか聞きたくない。」と拒否しました。でも、イエス・キリストは光のようなお方であります。むしろ正確には光そのものであります。**ヨハネの福音書 1:8～9** を読みますので聞いて下さい。『[8]**彼は光ではなかった。**（これは、彼というのはバプテスマのヨハネという人で、イエスのことを証しするために来た人です。）**ただ光についてあかしするために来たのである。**[9] **すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。**』まことの光、本物の光、これがイエス・キリストです。この方は、「**すべての人を照らす**」とあります。もれなく全員です。全世界の全人類です。全時代の人々を照らす光であります。光に照らされればどうなるかは皆さん分かると思います。当然影が生じます。罪の自覚はそのようにして生じるのです。本物の光を前にして、罪の自覚を感じない、覚えない、認めない人は、誰もいません。認めざるを得ないのです。

それが嫌なので、**ヨハネの福音書 3:16～21** のところにこう書いてあります。**16 節**から敢えて読むのは、これが福音だからです。『[16] **神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひ**

とりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（永遠の命を持つためにはどうしたらいいですか。単純明解です。御子イエス・キリストを信じれば、あなたは永遠の命を頂きます。天国に行ってからではありません。信じたその瞬間からです。だから、もう死は怖くありませんし、あなたは平安・希望・喜び・愛で満たされます。その続きに）[17] **神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。**[18] **御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。**[19] **そのさばきというのは、こうである。**（この後に注目して下さい。）**光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。**（やみというのは、罪の行ないです。）**その行ないが悪かったからである。**[20] **悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。**[21] **しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。**』と。イエスはまさに私たちの本当の姿を表す鏡のようなお方。私たちの心の暗闇を照らすスポットライトです。レーザー光線です。ピンポイントで、この青年の罪は、むさぼりの罪、貪欲の罪、物質主義、金銭主義でありました。それがこの青年の問題、何かが欠けているならばそこだと。この青年がどうしても空しさから解放されないのは、罪悪感から解放されないのは、これだとイエスは指摘しました。

この後この青年は、この裕福な議員は、救われたでしょうか。分かりませんが、そう願いたいと思います。同じような議員でニコデモという人、サンヘドリンの議員の 1 人。また、アリマタヤのヨセフという人、同じような人たちであります。彼らはイエス・キリストを信じて救われました。

最後に皆さんにチャレンジしたいことは、もし今私が皆さんにもお分かちした 6 つのポイントが事実であるならば、本当ならば、すなわち**すべての人は例外なく誰でも創造主を知っている。**潜在意識の中で分かっているのです。神がいるということは。すべては神によって造られたことも分かっています。進化論を習っていたとしてもです。

そして 2 番目のポイントとして、**永遠への憧れをすべての人が持っている。**

3 番目のポイントは、**心の空しさを抱えている。**

4 番目のポイントは、**死への恐れ。**

5 番目は、**罪悪感の重荷。**

6 番目は、**キリストによる罪の自覚。**

これらはすべての人が直面する現実問題であります。これが全部本当であるならば、あなたが本当にそのことを信じるならば、大きく変わると思います。あなたがイエス・キリストのことを宣べ伝える時に、福音を語る時に、相手は「そんな話、興味ありません。聞きたくないです。後にして欲しい。今はまだ。」そのようなリアクションを聞くと私たちは尻込みしたり、しぼんでしまうようになって、そしてしゅんとしてしまうかもしれません。「もう言うのはやめておこう。もうこれ以上話すのはやめておこう。」となってしまうかもしれませんが、それは彼らの話を実際にあなたは鵜呑みにしているからです。実際に「聞きたくない。知りたくない。そんな話は興味がない。」これは何もかもが嘘です、誤魔化しです。これはサタンの嘘です。サタンの囁きだと思って下さい。実際のところは、彼らは創造者を知っているのです。実際のところは、彼らは心の空しさを抱えているのです。永遠への憧れを持っているのです。本当は彼らは死ぬのが怖いのです。本当は彼らは罪悪感でもう苛（さいな）まれているのです。本当は彼らは実際に罪の自覚を覚えているのです。でも、誤魔化しているだけです。聞きたくない、知りたくない、興味がない、関心がないと。自分を欺いているだけなんです。それは自己欺瞞ということです。それをあなたは真に受けて「この人は聞きたくないんだ。この人は興味がないんだ。この人は宗教的な事柄、霊的な事柄に何の興味もないんだ。この人に話したって無駄だ。」と私たちは思います。でも、あなたは今挙げた 6 つのポイントを本気で信じているならば、そうは思わないと思います。彼らは本当は聞きたいのです。本当は聞かなければいけないのです。聞くべきなのです。どんなに幸せそうに見えても「いや、私には必要ないです。何不自由していませんし、何もかも揃っていますし、宗教なんか要らないんです。充分満たされています。」嘘です。誤魔化しているだけです。カモフラージュしているだけです。そのように振舞っているだけです。本当は行き詰まっているのです。本当は怖いのです。本当は苦しいのです。本当は空しいのです。本当は怖くて、苦々しい思いで、もう一杯なんです。不安で、不安で仕方がないのです。

でも、そこには答えがあるということを是非伝えて欲しいと思います。そこには自由、解放があるということを伝えて欲しいと思います。そして彼らの目を見て言ってみて下さい。「私は知っていますよ。あなたの本当の姿を。あなたが直面している現実を私は知っています。分かっています。本当のあなたの問題が何であるのかを私は知っています。でもここに答えがあるのです。ここに解決者がいるのです。ここに救い主がいるのです。」と是非伝えて欲しいと思います。それは素晴らしいニュースです。グッドニュースです。良い知らせであります。それを福音と言うわけです。だからパウロと同じように「私は福音を恥とは思いません。」と高らかにあなたも宣言してみて下さい。「こんなことを言ったら馬鹿にされるかもしれない。」とか、興味もない人たちに、関心もない人たちに伝えるのはどうも。**ローマ 1:16** を是非読んでみて下さい。『**私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人**（勿論日本人も韓国人もアメリカ人も皆です。）**にとって、救いを得させる神の力です。**』福音は信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。すべてから救ってくれます。何もかも変えて下さいます。心の空しさも、死の恐怖も、何もかも救ってくれます。罪悪感も、何もかも解放して下さいます。どうしてもやめられなかった罪も、変えられなかったこの悪癖も、依存症・中毒症となってしまっている問題も何もかも、この方が救ってくれます、解放してくれます。是非、救いを得させる神の力、これが福音であり、これがイエス・キリストであるということを伝えて欲しいと思います。あなたが出会う人すべてです。クリスチャンでない人ならば、今挙げた 6 つのポイントは全部当てはまります。あなたが信じないならばそれまでです。信じない人は多分福音を宣べ伝えることを恥と思っていると思います。「恥ずかしい。私にはとても出来ない。」それは信じていないからです。本気でこの 6 つのポイントを信じるならば、あなたはもはや福音を恥とは思いません。本気で信じます。「これは救いを得させる神の力である。これを伝えずにはいられない。」というふうに変えられます。

イエス・キリストはこのことを青年に上から目線で、冷ややかな目で、厳しい目つきで語られたのではありません。これは最後に開いて頂きたいところですが、**マルコ 10:21** のこの物語の並行記事です。『[21]**イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。**（いつくしんで言われました。）**「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」**[22] **すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。**』イエス・キリストはその人を見つめて、彼の目を見て、彼の心を見通しながら、いつくしんで言われました。いつくしむという言葉は、愛すると同じ言葉であります。愛したのです。イエスはこの人を愛して言われたのです。福音を宣べ伝える時には、是非その人を見て、見つめて、いつくしんで話してもらいたいと思います。遠慮は要りません。彼らが拒んでも、彼らは必要としています。遠慮は不要ですが、彼らは福音を、イエスを、あなたを必要としています。いつくしんで語ってあげて頂きたいと思います。今日あなたはここで「余命今日一日。」と言われたらどうでしょうか。「今日死にます。」と言われた時には、あなたは間違いなく「私は永遠の命を持っていますから、天国に行きます。」と、そのように確信を持って言えるでしょうか。それとも「今日死んだら、私はどうなるのか分かりません。怖いです。正直もうパニくってしまいます。」でも、死は年齢に沿って、年功序列で来るわけではありません。急に大地震、巨大地震が来て、急に津波で一瞬にして命を失ってしまうこともあります。脅すわけではありませんが、それが現実であります。急にこの礼拝の帰り道、交通事故で死んでしまうかもしれません。急に心臓発作か、脳梗塞で、その場で即死してしまうかもしれません。その時にあなたはギリギリまで恐怖におびえながら、おののきながら「あー、死にたくない。死ぬのが怖い。」と思ってあなたはこの世を去ろうとするでしょうか。それとも「私はいつ死んでも準備も出来ています。覚悟も出来ています。そして私には希望があります。確信があります。いつでも死ねます。喜んで死ねます。なぜならば私が行く世界は、素晴らしい本物のマイホームが待っている本当の故郷だからです。」と。「天国に引っ越しをするだけなんですよ。」と、それが私たちクリスチャンであります。ですから、もしこの中に「私は今日死んだらそのような確信もありません。天国に行けるなんていうことは絶対に言えません。もしかしたら私は地獄に落ちてしまうかもしれない。」そのような恐れや心配を抱いている方がいるならば、是非今日がチャンスです。明日はないかもしれません。来週はないかもしれません。この場で是非決心をして下さい。

イエス・キリストを信じる者は、永遠に滅びることがなく、永遠の命を持ちます。そのことを是非信じて、そして明日何があっても動じない、揺るがない平安、そして希望と喜び、満たしに溢れる、これ以上の幸せはないという、あなたに欠けたものがあるならば、それはイエスを神としていないことであります。そのことを今から祈りたいと思いますので、是非共に「私もそのようにしたい。決心したい。」そのように願われている方は、一緒に祈って頂きたいと思います。そして、もしもっと知りたいという方がいれば、私のところに来て何でも聞いて頂きたいと思います。では、今祈りたいと思いますので、目を閉じて心を合わせて頂きたいと思います。